

イタコ「オシラ祭文・神よせ」

北川 達男¹⁾

Itako (The Japanese shaman) Saimon “Oshirasama Kamiyose”

Tatuo KITAGAWA

Key words : 巫女, イタコ, 祭文, オシラ, かみよせ, カイコ, 養蚕

青森県三戸郡南郷村（現八戸市）に在したイタコ林ませ巫女が、弟子に伝授した「キョウモン（経文）」（祭文）のうち、オシラ祭文、神よせ・仏呼びの類の文言を紹介する。

一 オシラ祭文

オシラほうろぎ

手に取ればこそ手になづーて遊だ神かな
そもしもしらわの御本地 くわしく読み上げたのみたてまつる
昔 まんの（満能）長者とてありかの長者こと姫君一にもたせたもたのもだてたも
ひとり姫ことなれば昼はかげんのざしき
夜はかいごの遊び いげをかじげを かぎりなし
しかりに 満能長者の厩に
千だん黒毛 いつの名馬とて つながせたも
かくて 歳月ふるほどにたつ姫君も一 十六歳にならせたもとゆう
ときは つかじきいかに にようぼたつ 今年十六歳になりよけば
いままで 馬屋へおりて名馬 見物いたしたりことはなし
父母に おんめいはからいしのばせよとありければ
ざしきあいだにおんことてやいのびょうぶでしのばせたもなり
かおーどいじくしくめいばもさらになし 人間のみみなら 一夜の契り
ほめびきぞ あいそ一つさいどゆうべきものとして 千だん黒毛
かすみのぶつて三度なでたせたもう
姫君きんの一つまもとり かすみのぶつについにつき いそぎ馬屋いくせたまいば
なかにいづくにしく名馬も千だん黒毛あるもの
まず左の肩先にいづみとういしもんじわなながれ
右の肩先にはよねとしいしもん字はなな流れ
左りのそーどみだてまつればほつちようのもんじわなな流れ
右りのそーどみだてまつればやまぎようもんじわなな流れ
おーと申せば白いどよりかけたごとくなり
つめ申せば せんもくつめたごとくなり 耳申せばほつちよにほんたてたごとくなり
まなくはにつげつのごとく
しょうある名馬いことなれば それよりもいっしょうの歌をあそばせたまいば
ぬかかいみずかいくじょうわささのは とりかいたまいども それいじくにさだまりて
これはなんきょううかがわせんとおいにおどろきたまいども
とにも かくにも このとわきみに ごしろもうさばやとて おーまいにかしこまる
よしわかくと申す
あごれば 満能長者きこしめしさらば博士よんで

1) 青森県立郷土館 研究員（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

占いせよとありければ
 奈良の博士呼び寄せて いじじゃ占いなさりけり
 昔のざっ所に いまの暦をひきあわせ つくづく考えてみよう
 これやそも姫は 馬屋にてくだらせたまいば 恋いの病とて 悩みけりと占い申す
 満能長者は これを聞く おーいに腹を立つ
 かすみのふうについてつき いそぎ馬屋に くだらせたまいば
 白銀のそぎに腰もかけて 千だん黒毛のうつむかい
 昔は今にいたるまで
 人間を恋にしたると病もなし つくろいわ 人間を恋にしたると例もなし
 国のあるじに 国のこくしに こその思う間につくろいを
 みとして我が姫をいんにいるべきこと
 思いにもよらんとことは いがいにいたらせたもう
 しょうある名馬 いことなれば 千だん黒毛は まいびさうってしたをくいきり
 北に向かつて三度いななき 長者 おーせには 八人のとねるどもも とじなうつきり
 馬屋とり ひきいたしご恩が かわらぬ いそがせたもいそげば仏なく ご恩がわらになりよけば
 四本のくいをつきさらし おいてじょうがりけり
 南はるかごらんずれば みんなみたこそ くわの木のえだにさらしおいてじょう
 川をごらんじゃらむの名馬かな
 長きじゅ命であるべきには むいいにほやばやしてて そーろたり
 いづばづのきょうでろ 弥勒まんびんの念仏をとない ゆきに菩提といたもう
 かさねて姫君ある よーわいかにくろいのみなりとも しょうある名馬にますまさば
 われいじくいなりともつれゆかばとありければ
 黄金のそら 指をさし 天のはごろもまいくだり
 西より黒雲たち風にまかれて さいてんじょくい登らせたも
 満能長者の館には きみにごしろーも うさばやとて おーまいにかしこまる
 よしは かくと申す あぐれは満能長者はきこしめし
 天だのないしい いできたってみかぐを初め
 ななつがまをたて さにつざんやいしつにつ しつやおだくの
 ういで神おろし申せば きょうで七夜と申す とうのこくに 神はくだらしたもう
 満能長者の姫なればこれより
 三月の十六日ほど やしきまつせたも 月日につきもり
 ひいざれば はや長月の十六日にもなりけりぞ
 うの刻から たつのいてんまで 神風吹いてなもやかに
 五色の雲はたなべきぞ 五色にうつきり姫のたまでば
 こうは まい下り ふたおしひらき
 ごらんずれば しらかみ1枚 しきにくろみぞ
 いそぎ開いて 見たもな まことに白き虫 黒き虫
 2つの虫は 白き虫は姫の姿なり 黒き虫は千だん黒毛の形なり
 この虫のいんじきには
 南百ばんとゆう 木の葉をとり 白銀のまな板 包丁で押し切り
 いづきに かおならば さらさらと ふくじべきとて 神やあがらせたも
 長者 ふうふなのめに思し召し はつにんの とねるども 桑とりほーじゅうと 名づけたも
 三月七日 かわせたまいば つつごとなり
 つつごなんずけると 名づけたまいば
 三月七日は せたまいばにわごとなり 三月七日はせたまいばさきごとなり
 かわせたまいば はめしはんじょう
 黄金のたらい ふなより入れて ふなごなんじょうとなずけたまいば
 これより 南に宝仙という山がある
 高さはかんず 広さはぬかんず ある山は

あるかの山の木を切りてつれけども
面白やと とればこそとりが 西じゅくし 木の杖 うらぐも 大ききまいは つるのこのえ
小さき前かものこのえかもは かわらにしわかかわらくりつまたり
まいなればぬりて 千人かくて 千人かけて千人 三千人のぎょうぼ
ひとりにあいそいて 白銀のまたぶりとりもって
つじを手にさげて 五色の糸をあやにかけて
しそくのみょうごを ごてじゅくに
いまめを姫はくだらせたも

(参考) 『民族』第参卷第四號 (昭和三年五月一日 民族發行所發行)

「 蠶 祭 文 二 章

前者は三河國北設下津具村、後者は同郡豊根村曾川の神樂に用いられて居るものである。

(早川孝太郎)

こ だ ま

そもそもこだまの濫脳を尋ぬるに
長者も數多ありけるその中に
せんめう長者と申すは
有徳な長者で
七間馬屋に七匹揃へて
白秋の馬舟をもって
おん飼ひ召されさうろうぞ
せんめう長者の一人娘に
玉世の姫と申して
明け七歳にて大美人のおはし給ひ侯が
ある時七日七夜も七日七夜も
湯水を絶して悩ませ給ひ侯なり
同じ月日と申すに
馬屋一番の蘆毛の駒が
秣を絶やいて
七日七夜も七日七夜も伏沈み候へれば
姫の悩みに馬の悩み
月日も變らず候を
親なる長者は之ぞ不烈議と思召されて
博士をよんで占ひ給ひ候へば
馬屋なる駒に戀せられ
それ故姫も悩ませ給ふと
占はれ候ひければ
その時せんめう長者宜ひけるは
如何なる前世の報いたりとも
長者の娘とも言はるる者が
馬畜生に魅入られては
人間界へ生ぜし奇特もあらじと
怒り罵り蘆毛の駒を引起させ
ひらくべてうとはね落とし
皮を剥いで戌亥の方に
洒ざ給候へければ

不思議や其皮頗りに動いて
大地へ揺り落ち
玉世の姫の寝間へ飛び
くるくると娘を捲きしめ給へば
折節まき風しきりに起りて
虚空へ捲上げ行方知れず候ひければ
これこそ希代の珍事と
又もや博士を呼んで
占なひ召され候ひければ
今は天にて生を變じて
こだまとなって
桑の緑に集り候が
招けば此國へも降ると
占ひ給ひ候へば
さらば招いて見んと
國々に名を得し行者を呼んで
招かせ給ひ候なり
『天竺のこだまを此國へまねいた
招いたよ招いたよすなり招きこんだ
此國のこだまを此村へまねいた
招いたよ招いたよすなり招きこんだ
此村のこだまを此家へまねいだ
招いたよ招いたよすなり招きこんだ
此家のこだまを此家の北の方の左の袂へまねいた
招いたよ招いたよすなり招きこんだ』
左の袂に三日三夜
右りの袂に三日三夜
兩方合せて六日六夜
三日に水引四日にせいきが増して
五日にいづれば鷹の羽がひをもって
紙一枚へ掃き集め
桑の若葉で飼はせ給ひ候が
天より降りて初めて紙にて育てし
ゆはれをもつてかみごと名づけ候なり
紙にあまればたかみへ移し候ひける
ゆわれをもつてたかごと名づけ候なり
其の後たかみにあまり舟にて飼ひしを
ふなごと名付け
又々舟にもあまれば
ひろ庭にて飼ひ初め候
ゆはれをもつてにはごと名附候なり
其時せんめう長者も
よくよく御覧なされ候へば
あたまの黒きは我子のかたち
からだの白きは馬のかたち
これぞ不思議の宿縁がなど
よくよく因果の這理を悟らせ給へ候なり

こたねひろひ

そもそも昔は長者が七人
 七人の長者の中にも
 せんめう長者と申すは
 有徳な長者でさうろいければ
 名馬の駒を七匹そろへて
 黄金の馬舟で寵愛召されさうろいければ
 中にも蘆毛の名馬と申すに
 王世の姫と申すが心を靡かそ給へ
 その時姫も
 七日七夜湯水を絶やいて悩ませ給へ
 名馬の駒も草水絶やいて悩ませ給へ
 かくの如くに候ぞ
 せんめう長者も不思議な事とて
 博士に占へ申させさうろいければ
 名馬の駒に玉世の姫と
 心を靡かせ給へと申されさうろいければ
 そんめう長考も聞召し
 馬畜生に魅入られては
 いかがすむべき事かと
 蘆毛の名馬のそらくび放いて
 皮剥ぎとらせ申して
 前なる桑の木の
 東む方へと差たる枝へ
 張るせ申して晒させ給へば
 姫をも同座に行なへ給へば
 天よりつもじ風が吹降つて
 蘆毛の名馬の皮を
 天へ捲くさうろいければ
 来三月は蠶種と變化申して
 此國へ天降らせ給へて
 前なる桑の木に宿らせ給へて
 桑の若葉を食ませ給へて
 せんめう長者も不思議な事とて
 博士に占なひ申させさうろいければ
 蘆毛の名馬と玉世の姫と
 蠶種と變化申して
 日本の賓となり申して
 天降らせ給ひさうろいければ
 さるによつて
 桑の若葉を食みたる時をちちこと申なり
 たかみで飼ひたる時をたかこと申なり
 舟で飼ひたる時をふなごと申なり
 庭で飼ひたる時をにはごと申なり
 しゆくで飼ひたる時をしゆくごと申なり
 その時せんめう長者もご覧じましまし
 頭の黒きは吾子の末なり
 軀の白きは名馬の末ぞと仰ある
 四度の起伏難なくく癖なく
 絲にて千分面綿にて萬々分
 徳を搔いとらせ申して

神前ではお袈裟と掛けて
拝ませ給へさうろいければ
佛前では九條お袈裟と掛けて
拝ませ給へさうろいければ
蠶種と申すも
かのおんゆはれにてさうろうぞ
天より蠶種を此國に招き給へ
此國の蠶種を此當所へ招かせ給へ
此當所の蠶種を之の館へ招かせ給へ
此館の蠶種をこれのお部屋へ招かせ給へ
此な部屋の蠶種を亭主の左挟へ
招給へさうろうぞ
蠶種招きを遊ばする間に夜がほげて
あけてつとめて福を給はる

」

オシラサマで背中をはらうとき
頭の痛みなく 肩の痛みなく 腰の痛みなく
十六善のオシラ神をもって 三百六十五日のケガレをはらいたまい 清めたまい

二 神よせ

神呼び
一の弓 まず打ちならしのはじめよぶ
この村の神々からまでしょうじいれ申す
二の弓のねごい呼ばところの神こそ神々までしょうじいれ申す
三の弓のひびき呼ば 日本六十六か国の神のしいさくはこーとーじんまでしょうじいれ申す
ほめやきこしめし
十六の大国 五百の中国 十千の小国 無量はそくさん国のそのならい
北は北陸佐渡ヶ島 南は南海ほどらく 東はやごろの 西はいべしの浄土が
四方四角に四つの神明のしむより 数のしいさくはこーどーじんまで しょうじいれ申す
この弓いじくは 弓ぞ 伊豆の国 まさしや島のはる弓
まさが島の弓ならば らまされたんべついまされそーや
このおけいじくはおけぞ 伊豆の国まさしや 島の曲弓
まさしや島の弓ならば うらまされたんべつのおされそーが
この竹いじくは 竹ぞ一伊豆の国まさしやに うち竹
まさしや島の竹ならば うらまされたんべついまされそーや
木弓つきの弓 しげどうの弓とは とんの弓 あたたる山のはじ弓
うらまされたんべついまされそーや
こじょうの神のさぶろ一どのし四じょうのたたみに四じょうのむしろをしく
八尺の弓を七尺五寸のしるきに つるをかけ もとはじには くりから うどぬりたんもうもう
中はじには みだやくぬりたん しいさくはこーどーじんまでしょうじいれ申す
黄金百両 さぶろ一どの いんまおんにてつかいとにも たてまつる
さんごのあらまに三十川だいがはうばのまいてまつる
さんごのあらみに三十川 だいがは
うばのまいにてしきとるふだじんまで しょうじいれ申す
そらになるい いかじつのその下にいじり神はただせましまし
さぶろ一どのどーりでんには ひのいかじつ
こてんじゃくの はじよーのこーぜんはじよーぜんしだのこ国の

こーぜんのはじょーぜんしだのこ国のてんじゅくには
 かんぎどのとてぎょうの こーぜんまでしょうじいれ申す
 津の国なんばんの天能寺 そでひこのみこと
 大山寺に小山寺 しどの浄土
 しろむねのこそ おぎながに いんごのしろよ一つごみや大やしき山 土佐の国 こまつは
 一つそーの権現までしょうじいれ申す
 つぼの脇には すすめの神 のぎの下には 乃木わらの かんぎどのとてにようの
 こーぜんまで しょうじいれ申す
 桑の木の下にこそ 十六善のおしらがみとて
 神はさんだいおだつある 神々までしょうじいれ申す
 たてのもとにはよこだの神 あさの中には おさそーの明神とて
 神はさんだいおだつある神々まで しょうじいれ申す
 いんだてのもとには はなだの明神 まりこのひといにせんだの神は ゆりぎさせたんも やくし仏はおだ
 つある神々までしょうじいれ申す
 神の数は七百七そーのこーりの神々までしょうじいれ申す
 虫の数は 五十みそろいの虫の数と 申せども
 おんところのせせなぎの虫ぶぞーの虫とはてしり虫 うじ虫 け虫 ほじ虫 つじ虫
 くつわ虫 つめの中にはたるらん虫 こーろぎ虫
 はたおりきりぎりす ゆきことだが しょうじいれ申す
 その身にまんつんずこれ鳥のかずは 四百四方の鳥の数と申せども
 らいその鳥とさだまりて大の鳥 小の鳥
 ちゅうろいつとせやせろどりあわどり ひわこんがら
 おーみにはまごじわかもめんどりさんにゃのけだもの にわとりと申す
 そーじょうには 親のせんばん鳥なれば つのい いちじょうならべやとばんとりにてましましか

ホトケ呼び 恐山

イーヤエ ただいまのしえ木の枝に何がなる。ナムアムダブツ 水の木がなるよ
 (何)月(何)日のホトケ様を呼び申そうや
 極楽のしんでの山を急いで参る
 神の浄土か 思いそめてのだいがんか 心よせてのだいがんか
 といようかいまほのぶのどしょうじ
 ゆるさ山 いま申せば かりごりながらも かりすがながらも
 おきや沈む次第のよーもうまにうかんばせと
 今日的地獄次第のおやしろに呼ばれてありがたい。・・・・

ホトケ呼び 戦争で死んだひと

イーヤエ ただいまのしえ木の水よば 百里に急がせよ
 百里の水よば 十里に急がせよ
 十里の水よば 一里三里と急がせよ
 三里の水よば一里と急がせよ
 はるばるどうどう 海 川越えて 河原を越えて急がせよ
 ここはどこよ ここはふるさと
 ふるさとならば おりて 物語りそーや
 (何)月(何)日のホトケ様を呼び申そうや
 しんでの山を急いで参る
 神の浄土か 思いそめてのだいがんか 心よせてのとだいがんか

ホトケ呼び イタコをおろすとき

イーヤエ ただいまの片手にかけたる 袈裟衣
 左の手にはしろき神や 右の手にはしかのまき

ふで とりもって 読めや 書けやと 読み 信じる
極楽浄土と急いでまいる 神の浄土かな
思いそめてのだいがんか 心よせてのとりごいながらもかり
姿ながらも 月にうかんばやと

さむらいの神おろし

しいさくは いまでましまし
ながはまに なかでやしむ しかるましらんな
神みかちみづ ももみづ みじななつ
中なる水は 神のかよる みづかみ くだる
神風 そよがめ おる舟は 下には しぎなるこまつに
たづなよりかけ よじゅん馬に かいくらおいで
にわだづ にわのみそめで たづね神かいそーや

大工の上げおろし

この館の いかなる大工は おもしろやと
ほめて立てたそ だいらかな
だいらのうちに こがねの花さく ましてさして
なぎにこがね ふるなるもの

内神様の上げおろし

しきわたし神のりそーばとろどると
みかさの山にゆるりとらんな
けさのあさ口に黄金にまさる朝日かな
夕日も輝く
月も 月もくまの日も
まいれやどーさも たもとたらそーや
みだいのほーくらむるに 月こそませや
夜も照らそーや

大黒エビスの上げおろし

ほいるみかどは ななみかど
みかどの脇に松植えて
まつもろともに しさしかるらんな
そーめを松につるしかけ
鶴亀見れば はたらく松ゆるぎ
ゆるがんまつわいまつかな

八幡様の神おろし

はやはちしんなしむらんな
きゅうし きゅうしど おこないば
西をうみ 東はなぎそ はなやはこそはそ
八幡どの弓にじょうじて ももや みせども
あさやなるもの おにもど みわや
おみやかに こもとみわや おみおやかに
こもとみ山やしぎやかに
しぎぞのおるとて あさだ神かな
やわたをば 八幡さま

十和田様の上げおろし

しみじみもよいじみぞ かげもます
ひとわをかいてせぞーとばそーやー 十和田山
十和田の水はおりて おいらせ川の 遊んだ神かな
十和田の水は するくねど にぐらざる

山の神の上げおろし

山の神 背は大きく 目はばっちり
鼻高く 色白く
山の神 おんたきに わこの白そでに
ななしろたつに まいらせたり

仏様の上げおろし

このとのせいじ ところに旗立てて
そ国のむねをまねせるうつせるにわの おりめはかめななつ
じょうかめは さざらがめ さざら波うらもはんぞ
ところもはんぞ しきじもはんぞ
しいはんぞーと 申す 清め申す
西に千年 南に千年 東に千年 北に千年
ひゅう千年のひじょうとも あいかわらせたまいば 夢いり申す
しきじもはんぞ われらもはんぞ
村もおだやか ところもはんぞ
しいはんぞーと 申す 清め申す
極樂のしえ木の枝に何なる
なみあぶだぶつのみづの木なる
極樂のみどーのまいにななせ川
ななせもやせも わたらせは おや子に あうせ人せなるもの
極樂の枝に いづわかが みだなかがみだばこそ
よるくる人のかげはうつそうや
極樂のわがくる里に来てみれば もつべきものには じじまもり
さらわんものには 夢とうつだけ
極樂の我が親は 弱さがしまに こーもって
親のわとれ あとをとわるる
いろよき花を手にもたせ あげやしらごーや
極樂もしでの山 いかなる文字もふにそめて
いくとはみいど 戻らざるものかえらざるもの
極樂のおーりがけが 梅の花けさふく風に 枝をたおされ 花をたおされ まつべて夢いり
極樂のこよしき人の墓見れば 見るより早く 涙でるもの
極樂のこよしき人にあうときは 心のうちから 仏のこそーや
極樂のびしんなかすみ が やみのよか いま来てみれば つくひのしょうども はなの極樂
極樂のみやまかくれ ほととぎす 姿はみいぞ 声ばかりそーや
極樂のもりか 林かふるさとならば おりて物語りそーや

送るとき（仏様の上げおろし）

一番しまいに よしととめがみあら神 しじょう もろともに
こんがのうりくち ごかいの神 おーみにわが りょう神まで
うかべてもきく はしめて はしめてもそーや

神を送るときに読む

東のすみにも神とどまんな
西のすみにも神とどまんな
南のすみにも神とどまんな
北のすみにも神とどまんな
四方のすみにも 神とどまんな
おなぎの下にも神とどまんな
ゆるりの下にも神とどまんな
たたみの下にも神とどまんな
戸に立つな まどに立つな
六万八千六の仏呼ばれ
雨のさえらなき 風のさえらなき
主ある神は みやみや林までおおくりとどつけ申す
主ある仏呼ば寺々までおおくりとどつけ申す
主なき神呼ば野さも山さもだけだけ
島々までおおくりとどつけ申す
主なき仏呼ば野さも山さもだけだけ
島々までおおくりとどつけ申す

神様を送るとき（神呼び）

かけまくも かしこき心に
光臨のいっさいの精進たちのもとの
こんきゅうに 送りたてまつる
おそれながら うけしきたまわいて
このじゅうしゃ けいふく てんぷく かいらい
ちふく えんまん しんちん しんりき
ほうがんじょうじゅと守らせたも